

「ニート」論の批判的検討

「ひきこもり」当事者の語りから

石川良子（東京都立大学大学院）

1. 問題の所在

本報告の目的は、「ひきこもり」から見た「ニート」論議の問題点を指摘することにある。

「ひきこもり」は1990年代半ばごろから関心を集めるようになった。当時「ひきこもり」は若者のコミュニケーション不全の問題とされ、「人とふれ合いたいのになにもしない」「社会に出ることを望みながらも出ることができない」という葛藤が議論の中心的テーマになっていた（e.g. 富田 1992）。しかし近年では、対人関係獲得後の当事者たちの閉塞状況を背景に、そうした心理的葛藤よりも就労の有無を重視する傾向が強まっている（塩倉 2002）。こうした流れの中、「ニート」は「ひきこもり」を回収するような形で登場してきたような印象がある。

実際「ニート」に関する議論において、「ひきこもり」は「ニート」に重なり合うものとして扱われている。たとえば、小杉・堀（2003）では、「就労意欲のない inactive な若者」をサポートする機関として「ひきこもり」の支援団体が位置づけられている。また、玄田・曲沼（2004）では、対人関係に対する自信のなさや不登校との連続性が強調されるなど、そこで描き出された「ニート」の姿は「ひきこもり」にかなり近い。さらに玄田・小杉ら（2005）に収められている対談では、高学歴・高階層の「ニート」として「ひきこもり」が位置づけられている。

しかし、「ひきこもり」と「ニート」が問題化された文脈は異なっており、両者を重ねて論じることには無理があるのではないかと考える。そこで、本報告では「ひきこもり」当事者へのインタビューを手がかりに、両者のズレにつ

いて考えてみたい。

2. 調査概要

本報告では、Aさん（男性・1974年生まれ）へのインタビューを取り上げる。首都圏で活動していた自助グループの参加者で、2001年・2003年にインタビューを実施した。

Aさんがひきこもった直接のきっかけは、大学卒業後の進路を決定できなかったことである。大学を卒業してから約2年間、家族以外の人との関わりを持たない状態を経験した。そこから抜け出すきっかけになったのは、ある雑誌に掲載されていた「ひきこもり」の紹介記事で、それから斎藤環の診察を受けるようになった。しばらくしてグループ活動にも参加し始め、自助グループの設立・運営にも関わっていった。

Aさんの特徴としては、当事者の中でも積極的に「ひきこもり」に関わっているタイプであること、斎藤の治療論を手がかりに「回復」の道筋を模索していることが挙げられる。

3. 「ひきこもり」当事者の語り

【2001年】Aさんは、自分がひきこもったのは「学校を卒業した後はすぐに就職する」というライフコースを絶対視し、そこから外れることで生き方を見失ってしまったためだ、と考えている。そこで、就労よりも対人関係の充実を当面の課題とし、積極的にグループ活動に関わっていた。

また、多くの人と出会う中で「働くだけが人生の全てではない」という新たな価値観を学び、それによって自己を肯定的に捉え、未来への展望も描くことができるようになった。

【2003年】前回インタビューを行ったときと比べて「進歩がない」という現状認識を持っていた。ただし、グループ活動への参加状況や心理状態などについては変化があったことを認めており、それにもかかわらず「進歩がない」と語るのは、働くことができていないからである。Aさんにとって就労は外すことのできない課題として捉えられており、それを達成できないことが彼の自己評価を著しく低下させているようだった。

しかし、その一方で就労を最重要課題とするような近年の風潮に疑問を感じており、それでもなお就労に執着してしまう自分に対して複雑な心情を抱えているようだった。また、今までに自分がやってきたこと、すなわち自助グループの運営に成功したことや様々な人とのつながりを得たことなど、就労に関わらない側面に関しては高い自己評価を保持していることもうかがえた。

4. 考察

Aさんへのインタビューの中で「ひきこもり」と「ニート」のズレを考える上で特に重要と思われるのは、次のようなジレンマである。それは、Aさんだけではなく多くの当事者に共通するものといえる。すなわち、就労に向けて行動を起こしてはいないが、だからといって就労意欲が低いわけでは決していない。むしろ「働かなければならない」という意識は非常に強い。だが、同時に就労の達成を重視する昨今の流れに対して疑問を感じる部分もあり、それゆえ就労に執着する自分に対して抵抗感をも覚えてしまう。

こうしたジレンマを抱える人々にとって、「ニート」に関してよく言われている「働くことの意味に拘泥せず、とりあえず行動を起こすことが重要だ」といった「処方箋」は、果たして有効なのか。おそらく、働くことの意味を問うてしまうから働けないということと当事者自身もよく分かっており、それで

もなお問わざるをえないところに彼らの苦しさや難しさがあるように思う。とすれば、上記のような言葉は一部の当事者にとってはあまり意味がなく、むしろ彼らの葛藤や無力感を深めることになりかねないのではないか。

これまで十分に政策的支援が届かなかった層を掬い上げるために「ニート」を導入したという意図は理解できる（小杉編 2005）。しかし、そこには当然「ひきこもり」ではない層も含まれることになり、よって「ひきこもり」独自の問題、たとえば本報告で取り上げるような当事者の葛藤が取り残されてしまう可能性は否めない。そこで、「ひきこもり」に関する議論において何が問われていたのか改めて明らかにし、その上で「ニート」として扱える問題と、そこには回収しきれない問題とを区別し、論じ続ける必要があるだろう。

文献

- 玄田有史・曲沼美恵, 2004, 「ニート——フリーターでもなく失業者でもなく」 幻冬舎。
- 玄田有史・小杉礼子・日本労働政策研究・研修機構, 2005, 『子どもがニートになったなら』NHK 出版。
- 小杉礼子・堀有喜衣, 2003, 「学校から職業への移行を支援する諸機関へのヒアリング調査結果——日本における NEET 問題の所在と対応」 日本労働政策研究・研修機構（ディスカッション・ペーパー・シリーズ）（http://www.jil.go.jp/institute/discussion/documetns/dps_03_001.pdf）。
- 小杉礼子編, 2005, 『フリーターとニート』勁草書房。
- 塩倉裕, 2002, 『引きこもり』を見る視点』『高校生活指導』152: 6-13。
- 富田富士也, 1992, 『引きこもりからの旅立ち』ハート出版。